倫風宏話

「利他」を「普及」の原動力として

上廣哲治

「面白い美術展だから、ぜひ観に行くといい」。知人が、しきりに勧めます。浮世絵が西洋の美術作品にいかに直接的な影響を与えたかというテーマの企画展でした。元となった浮世絵と、それに影響を受けた西洋絵画の作品がわかりやすく展示されているのだそうです。西洋美術にさほど興味があるとは思えない知人がそれを観に行ったのは、友人からの強い勧めがあったからだといいます。「日本の浮世絵が、これほど直接的に西洋絵画に影響を与えていたなんて知らなかった。面白いから絶対に観に行くべきだ」。感動した彼は、私にも観に行くように勧めたのです。

人間には感動をしたり喜びを感じたりすると、それを人と分かち合いたいという本性があります。自分が善い体験をしたので、あなたも同じ体験をしてほしい。その喜びを分かち合いましょうというわけです。喜びや感動を分かち合い、互いに仕合わせになるという思いは、わが会の命ともいうべき実践、「普及の実践」の原点でもあります。

家庭内の困難な問題に悩み、苦しんでいたとき、わが会の教えに触れて救われた。自分の生活を「より善いものにしたい」と考えていたときにわが会に出合った。その喜びと感動を、今、もし同じような困難な状況にいる人がいたら伝えたい、そして、仕合わせになっていただきたいという思いです。

名誉会長も、「普及活動でいちばん大切なのは、皆さんが実践倫理と出合ったときの感動……。あの瞬間の感動を、一人でも多くの方に体験していただきたいと思う、それが普及の原点でしょう」と説かれています。

私たちを普及に駆り立てる情熱は、実践で得た喜びと感動にあるのです。それは他の多くの方々にも仕合わせになっていただきたいという「利他」の思いとも重なります。

しかし、身近な人、親しい人にならば、その喜びや感動を気安く語ることができるかもしれませんが、見ず知らずの他者に話すのはどうも難しい。価値観も性格も、考え方もわかりません。話しかけたら失礼ではないかという不安もあります。普及の実践が利他の行為であるにしても、他者との壁を乗り越えて、喜びや感動を伝えるのは難しい。そのような思いに駆られてしまいがちです。

仏教の開祖・ブッダ（釈迦）を、人間として研究したインド哲学の第一人者・中村元さんは、菩提樹の下で「さとり」を開いてから「教え」を説くまでのブッダの逡巡と苦悩を、さまざまな経典を手掛かりに、『ブッダ伝　生涯と思想』のなかで描きました。さとりを得たブッダは深い喜びに満たされ、何日も瞑想にふけっていました。しかし、さとった真理を人々に語らねばならないと気付くと、躊躇いが生じます。経典『サンユッタ・ニカーヤ』は、その時のブッダの苦悩を次のように表現しています。

「わたしのさとったこの真理は深遠で、見がたく、難解であり……。……だからわたしが理法（教え）を説いたとしても、もしも他の人々がわたしのいうことを理解してくれなければ、わたしには疲労が残

るだけだ。わたしには憂慮があるだけだ」「苦労してわたしがさとり得たことを、今説く必要があろうか。……人々が、この真理をさとることは容易ではない」

ブッダは、教えを説く前から、他者に理解させることの難しさを思い、無力感にとらわれていたのです。しかし、もしブッダがさとりの真理を説かなかったら仏教は生まれません。

ここで経典執筆者は、ブッダを説得する役割を「世界の主・梵天（ブラフマン）」という神に担わせることにしたようです。梵天はブッダの前で嘆きます。

「ああ、この世は滅びる。……正しくさとった人の心が、何もしたくないという気持ちに傾いて、説法しようとは思われないのだ！」「尊い方！　……教え（真理）をお説きください」

ブッダは梵天の頼みに応えて説法することを決意したのです。

中村さんは、ブッダが説法を決意したときに、教えを説く真の意味を理解したのだと考えました。

「（教えを）『説かなければさとりは完成しない』……。言い換えれば、現に生きている人々の生き方の問題から離れて、どんな立派な真理もさとりも存在しないことをブッダはさとったのだと思われます」

倫理実践も同じです。われわれが自分の家庭の仕合わせだけに満足するのであれば、「家庭愛和」の実践は完成したとは言えません。わが会はすべての人が「明るく仕合わせな生活」をおくることのできる理想社会の創建を目指しています。そうであるならば、一人でも多くの方に仕合わせへの「すじ道」を歩んでいただきたいのです。そうでなければ倫理実践は完結しないのですから。

ブッダは説法をして衆生をさとりに導きますが、生活倫理を標榜するわれわれは、自らが実践している姿を通して理解していただこうと努めるのです。導くのではなく、見ていただき、知っていただき、お役に立たせていただくのです。

思い出してください、ご自身が入会されたときのことを。苦難を抱えていたとき、先輩会友はどうしたでしょう。あれこれ説教するわけでもなく、何も言わず、私たちの悩みや不安にただ耳を傾け、受け容れてくれたのではなかったでしょうか。苦難をともに引き受け、ただ寄り添ってくれた。その思いやりと優しさが実践の励みとなって、仕合わせを実現してきたのではないでしょうか。入会の喜びと感動を与えてくれたのは、先輩会友の「利他の実践」だったはずです。

このように人の話に耳を傾け、心に寄り添うような利他の実践こそが普及の原動力となるのです。もちろん利他の実践は、入会していただくための手段ではありません。利他の実践をして人を窮地から救い出すことができたとしても、入会するか否かはその人の選択に委ねるしかありません。

「普及」とは、さまざまな方々と真剣に向き合い、寄り添い、善い人間関係を結ぼうと努力するなかで、自らの人格を高め、人間力を向上させるための実践なのです。

言い換えるならば、「他者という鏡」「社会という鏡」に自分の倫理実践の姿を映して、足らざる部分に気付くことのできる実践ということです。

そこで今月の実践課題です。普及そのものが、いわば利他の実践であることを再確認いただきたいのです。結果に一喜一憂する必要はありません。チェックポイントは他者と真正面から向き合い、その話に耳を傾け、受け容れることができたか否かです。「社会という鏡」のなかに自らの足らざる部分を見出し、それを補う実践に踏み出せたか否かです。溌剌とした普及活動で、本年後半の実践を潔くスタートさせようではありませんか。